

報告者 泉正樹（東北学院大学）・平子友長（一橋大学名誉教授）

討論者 平子友長（一橋大学名誉教授）

世話人 原田哲史（関西学院大学）・大塚雄太（名古屋経済大学）

参加者 約 30 名

『資本論』第 1 巻 150 周年の昨年に引き続き、生誕 200 周年の今年もマルクス（1818～83 年）を取り上げ、彼の思想・経済学の意味を考察した。報告を予定していた的場昭弘氏が急きょ欠席されたため、討論者の平子友長氏に報告もお引き受けいただいた。

第 1 報告（泉）：マルクス経済学の基礎理論を今日において学ぶ意味

確定したテキストとしての「マルクスの経済学」は、マルクス自身が読み手を想定して書き、自らの手で刊行した『資本論』第 1 巻に示されている。そこでは、〈資本主義の歴史的発展を理論的に解明する〉という課題に対して、基本的な諸概念をまず定義し、それらを前提に演繹を行うことで、資本主義がそれ自身の論理を純粋に展開する結果その歴史的使命を終えるという〈理論〉が提示されている。

この「マルクスの経済学」を批判的に摂取し、独自の「マルクス経済学」を構築したのが宇野弘蔵（1897～1977 年）である。宇野は、『資本論』が極限として描いた資本主義の純粋像に論理的な総点検を施し、資本主義それ自身の論理の純粋な展開によってもたらされるのは、反復という意味での自律性であるという〈理論〉を提起した。こうした「マルクスの経済学」の「体系的純化」は、その裏面として、〈資本主義の歴史的発展〉という「変化」の問題を〈理論〉の外部に押し出した。「変化」の問題は、不変の〈理論〉に対する「非商品経済的要因」の作用によると見定められ、資本主義の歴史的発展段階論という独自の考察領域で扱われることとなったのである。

マルクスと宇野は、現実の「社会主義」を念頭に置き、それぞれが生きた〈現代〉の歴史的意味を問うという問題関心から発している。そこに示された〈現代〉は、資本主義の終結を予感させるものであった。翻って 21 世紀の〈現代〉は、資本主義の歴史的発展のうちにどのように位置付けられるだろうか。この問いに〈理論的〉に答えるべく、マルクス経済学の基礎理論の領域で研究がなされ続けている。

第 2 報告（平子）：「後期マルクスの理論的探求」

MEGA の刊行によってマルクス研究が大きく変貌せざるをえない最大の理由は、これまでマルクスのスタンダードなテキストの役割を果たしてきた„Werke“（『マルクス・エンゲルス全集』）はもはや研究資料としての価値を失いつつあるからである。このことは特にマルクスの経済学関係文献に当てはまる。『資本論』および『経済学諸草稿』を網羅した MEGA

第2部門(1~15巻)は2012年に完結した。『資本論』第2巻、第3巻はマルクスの死後エンゲルスによって編集された作品であり、厳密な意味でマルクスの著作であるとみなすことはできない。また『資本論』第1巻はマルクスの著作であるとはいえ、それが刊行された時点(初版は1867年)における見解であり、その後も彼の理論が絶えず変容し続けたことを考慮するならば、刊行された第1巻をマルクスの最終的結論であると断定することはできない。今後のマルクス経済学研究は、MEGA第2部門に収録された全資料を、彼の不断の発展と新研究分野の開拓の過程の中で捉える作業として遂行されなければならない。

新資料に基づく新しい研究段階において、現在、最も注目されている課題は、『資本論』第1巻刊行以後16年間のマルクス(後期マルクス)の発展過程を把握することである。後期マルクスを研究するための主な研究資料は、MEGA第4部門第18巻~32巻に収録された抜粋ノートである。それらは(1)同時代の自然諸科学と技術学文献からの抜粋、(2)西洋前近代における共同体と非西洋諸地域に関する地理学的人類学的研究からの抜粋。これら両課題がなぜ後期マルクスにとって経済学研究の不可欠の研究テーマになっていったのかを解明することが、後期マルクス研究の主要課題である。

『1863-67年草稿』(II/4.1-3)で切り開かれた次の3つの視点が、後期マルクスの研究方向を規定した要因である。(1)「物化された資本」「資本の生産力」の不可欠の構成部分としての科学技術、(2)「資本の生産力」による「人間と自然の物質代謝の攪乱」、(3)「諸国民の生命力を更新するための予備財源」としての小農的生産様式。

討 論

第1報告については、次の3点の指摘がなされ、それへの和泉氏の応答とでもって討論された。第1に、『資本論』第1巻初版は、マルクスの経済学批判の最終的結論ではない。近年の研究成果に基づいて、マルクスの実像を再構築する必要がある。『資本論』の最終目的が「近代社会の経済的運動法則」の解明であるとしても、後期マルクスにおいて、複数の国民国家の相互関係が射程に収められている点には、注意が払われなければならない。また、後期マルクスは、「資本主義的蓄積の歴史的傾向」で示されたヴィジョンから次第に自由になっていったことも重要である。第2に、資本主義の発展史を「純化」から「不純化」への過程として把握することは、恣意的である。自由主義段階の資本主義も、イギリス以外の西欧諸国や非西洋社会を含めて考えれば商品経済が「純粹」に貫徹していたわけではない。第3に、宇野理論の場合は、資本主義の生み出す諸問題は「原理」と「外部」の間に設定されるから、「原理」に内在する問題としては把握されない。結局「市場」を理想化する「新自由主義」と親和的な経済理論にならざるをえないのではないか。

以上に関連して、19世紀後半の経済学の動向のなかでマルクスの経済学=理論を捉える視点が必要ではないかという問題提起などがフロアからあり、報告者との間で活発な討論が行われた。